信州読書会　YouTubeLive&ツイキャス読書会

課題図書　太宰治 『畜犬談』

信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
（募集要項はメルマガでお伝えします）
また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会　ツイキャス　http://twitcasting.tv/skypebookclub
YouTubeLive　https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw
『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから　http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284
『ツイキャス読書会』 音声のバックナンバーです。
https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf
（各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。）

太宰治

『畜犬談』

第 290 回のツイキャス読書会の課題図書は、太宰治　の『畜犬談』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

青空文庫　太宰治 『畜犬談』

朗読しました。

メルマガ読者　MYZ さん

『蓄犬談』 感想文

この話を聴いた日に、上野動物園に親子パンダを観に行っていた。動物園のパンダは、新しく綺麗なパンダ舎の中で、大事に育てられているなと思った。その後にこの物語を読んだので、昔の人間の、動物への接し方・飼われ方の差に、驚いてしまう所もあった。

前半の方は、一行聴く度に作者の言い方が面白く、いちいち笑ってしまった。

まずは犬の事が怖くて仕方がない。故に犬を刺激しないように、犬に対して卑屈になり、おもねるしかなくなっている。恐怖のあまり、敵をくまなく観察する事になり、犬の生態にかなり詳しくなっている所に、作者のユーモラスさが出ていた。

かくいう私も動物全般は好きなのだが、犬は少し苦手だ。数年前、中国・上海の田舎に滞在していた時に、日本にはもう居ないタイプ(多分、蓄犬談の時代に居た野良犬と似ているかも)の汚ならしく、不恰好で、バイオハザードに出てきそうな野良犬達が、住んでいたアパートのこれまた汚いゴミ捨て場にたむろしており、3 メートル以上の塀で囲まれた細い路地を通るしか敷地外へ出られなかったので、「今奴らに噛まれたら、確実に狂犬病になって、私はこの地で死ぬ」と、当時の中国の衛生の進歩の遅さを呪うほど恐ろしかった事を思い出した。

最後の方は、「猫背、猫背」と強調している所が面白かったが、話は意外な結末になり驚いた。

動物よりも何よりも人間が苦手な私は、作者が犬に対してしていたような媚びへつらいを、人に対してやっているじゃないか、と気付いてしまった。

了。

（おわり）

メルマガ読者　エヴァタさん

ポチのことなんて全然好きじゃないんだからね！

（引用はじめ）

私はポチを愛してはいない。恐れ、憎んでこそいるが、みじんも愛しては、いない。死んでくれたらいいと思っている。

（引用おわり）

死んでくれたらいいのに、それを言っちゃあおしめぇよ。なのだけれど、結婚してうん 10 年経つご夫婦、義理の親の介護をする妻、ファンに囲まれてキラキラ笑顔のアイドル、大勢の読者に支持されている作家先生などなど、全国津々浦々にこんな共依存の人間関係があるんじゃないかと私は思うんだわん。

本当は怖くて仕方ない、ポチ、もとい〇〇に対して「満面に微笑を湛えて、いささかも害心のないことを示し」「にこにこ卑しい追従笑いを浮かべて」もね、やっぱり相手がいてこその自分。

（引用はじめ）

「でも、ちょっとポチが見えなくなると、ポチはどこへ行ったろう、どこへ行ったろう、と大騒ぎじゃないの」
「いなくなると、いっそう薄気味が悪いからさ、僕に隠れて、ひそかに同志を糾合しているのかもわからない。あいつは、僕に軽蔑されていることを知っているんだ。復讐心が強いそうだからなあ、犬は」

（引用おわり）

とかなんとか言っちゃって本当はやっぱり離れられないわだわん。

なぜ離れられないのか？　そりゃあきっとマウンティグしたいのでしょう。「ゆるしてやろうよ。あいつには、罪がなかったんだぜ。芸術家は、もともと弱い者の味方だったはずなんだ」と言った具合に。

で、いつしかマウンティグする方もされる方もひとつになって、だんだん似てきちゃうのだろうなあ。
世界もひとつになっちゃえばいいんだわん。ワッタァわんダブルワールド。以上

（おわり）

メルマガ読者　さくらさん

「犬の気持ち」

読み初めてすぐ、私が常日頃思ってるような事が書かれててビックリしました。

尻尾を振って友好的に見せかけて、ガブリと噛まれるのではないだろうかと常に思います。

なので散歩をしている人がいてちゃんとリードを繋いでいたとしても、そのリードがすごく伸びて私の方に飛びかかってきたりしないかと心配で、警戒しながら側を通るようにします。

犬を憎んでる訳ではないのですが、人間同士会話できてもちゃんと伝わらない事も多いのに、日本語を話さない犬の気持ちは本当に分かるのかと疑問に思うのが信用できない所かもしれない。

このお話の主人公も最初は私と同じ感覚だったのに、最後にはすごく可愛がっていて、飼うと気持ちが変わるものなのかな？と思いました。

でも、奥さんは最初から冷静に犬と接していて、捨ててきて！　と言うのは良くないし酷いけど正直な気持ちなのかもしれないなと思いました。

可愛い時も可愛くない時も一緒に居られる信頼関係が築くことが出来たら、いきなりガブリとやられる事はないかもしれないなと思いました。

（おわり）

メルマガ読者　TOTO さん

『畜犬談』 太宰治　感想文

「私は犬に就いては自信がある」
「きっと噛まれるに違いない自信」。最初からフェイントをかけられた。
ダス・ゲマイネの
「私の左の横顔だけを見せつけ、私のおとこを売ろうとあせり」のように、何だか分からず冒頭からぐっと引き込まれてしまうのだ。

こんなに犬を恐れているのは、やはり友人の三七、二十一日間の通院が痛く響いているのだろう。
猛獣と称し極度に恐れているが、主人公の犬への復讐心の方がはるかに残酷であることがとても矛盾している。

「犬の忠誠心は卑劣」、罵詈雑言を浴びせるように犬嫌いは炸裂するのだが、「自分と似ている」との落ちが情けなくてとても好い。

臆病と凶暴と、信心深さと残酷と、矛盾だらけの見栄っ張りとカッコつけは、いつもの太宰先生の正直な素直な本音である。あまり使いたくない言葉なのだが、何とも「可愛い人」たと思ってしまう。

犬を嫌い、恐怖心のあまりに犬を研究し過ぎてどんどん犬好みの人間になってしまい犬に好かれてしまう。
この「節度を知らぬ」行為はどんどん逆効果を生んで行く。その向学心と情けなさのアンバランスが滑稽であった。

常にリーダーになるべき存在を求めているという犬の習性を考える。
犬の顔色を伺い好かれるよに行動している主人は、既に子犬にばかにされている存在である。
しかし喧嘩に負け、心身共に成長していくポチが主人を主人と認めて行くことや主人がポチに対して変わっていく心の過程がじわじわと伝わって来るのだった。

醜いポチ、たまらない暑さの中での皮膚病の臭気を考えてみても、「殺してください」という妻の言葉は常軌を逸していたが、真実に近いお話だとすれば、妻の立場を考えて書くことを拒まなかったのだろうかと考えてしまった。

この辺りから、ポチは主の顔色とその動きをじっと感じていたに違いない。

我が家の愛犬は、散歩に行く時と獣医に行くことを、無言の私から感じ取っていた。言葉に出さなくても、医者に行くことを既に感じ取り全身が震えていた。直感的に散歩と識別している、そのことに驚いた。

主人は、「ぺちゃぺちゃと食べていた」と書いてあるのだが、ポチは既に何かを感じ取って主人を凝視していたのだと思う。背を向けてこちらを見ない主人の様子から、いつもと違うことを察し、きっと食べることをやめてしまったのだと思った。薬が効かなかったのではなく、なめただけで食べなかったのだ。それくらい繊細な神経を持っているのが犬であると思う。

※無断転載禁止

喧嘩を許した主人を、主人として認識し、置き去りにされることを直感したのだと思う。

「芸術家はもともと弱い者の味方だったはずなんだ」と妻に言い分けする主人（太宰先生）に、「本当に大丈夫ですか？」と思わず口から漏れてしまった。
この道化のような、とんでもなく矛盾を抱えた情けない主人の姿が笑いを誘った。やはり「可愛い人」である。

こんなにもずっと妻に気を使う主人と妻との関係を想像してしまった。
日頃の重ねて来たあるじの汚点のせいであるのは明白である。

とても面白い作品だった。

（おわり）

メルマガ読者　hoyo さん

畜人

好きの対義語は、嫌いではなく無関心だと思う。

多分、太宰は犬のことを本当は好きなのであろうが、犬を可愛がっている自分が滑稽に思えてしまう、それが一番厭なのであろう。

太宰らしいめんどくささである。

犬に対し大小さまざまな理由を付けて嫌いであると結論を出そうとしているが、その理由のどれもが、他のもの---猫だって人だって---にも適用しようと思えば出来てしまう。

人間はしばしば、結論が先に有って、それに対しての理由付けを探そうとしてしまうときがある。

そういったバイアスを取り除くのは、容易ではない。

生きた犬は危険だから殺してしまおうと考える人間は、いつか生きた人間も危険だから殺してしまえばいいという思考に落ち込んでいってしまう。

最期の毒入りのエサ、あれがもし効いていたらどんなふうに思っていたのだろう。あれはポチのためだったのだ、そんな風に言う気がしてならない。

ポチのような畜生にそれらが向けられている内は笑い話で済むのかも知れないが、その考えが一人でに歩き出して、自殺や心中という結末に向かって行ってしまったんじゃないだろうか？

人間のエゴで動物を搾取する現実を、危険な自己正当化で擁護しようとすれば、上記のような極端な思考に結びついていってしまう。

自分自身のため、私はあらゆる生命を踏みにじっている、まず、そういうことを認識して生きていくべきだ、そう思った。

（おわり）

メルマガ読者　千歳飴さん

ポチに首ったけ

太宰治作品では必ずと言っていい程、主人公が聖書についてちょっと語るのだが今回は無かったので、そこが少し物足りなかった。やはり太宰治にはキリスト教ねじ込んでほしかった。

とはいえ、自己嫌悪と自己愛のモノローグは今回も大きな柱で、主人公は相反する感情を同時に持つアンビバレンスの泥沼にはまりこんでいた。

主人公は、犬を嫌悪しているのに、その嫌いな犬たちをよく観察していた。餌が欲しくて媚びへつらう振る舞いが気に食わないなど、自分と似ているところが多いことに気づいてますます嫌悪する。

（引用はじめ）

雀を見よ。何ひとつ武器を持たぬ繊弱の小禽ながら、自由を確保し、人間界とはまったく別個の小社会を営み、同類相親しみ、欣然日々の貧しい生活を歌い楽しんでいるではないか。思えば、思うほど、犬は不潔だ。犬はいやだ。なんだか自分に似ているところさえあるような気がして、いよいよ、いやだ。たまらないのである。

【青空文庫　太宰治　畜犬談—伊馬鵜平君に与える—】

（引用おわり）

主人公の気持ちは分からなくもない。私自身が、自分と共通点が多い他人は、やることなすこと鼻につく、でも気になって観察してしまうということがある。これも自己愛と自己嫌悪の感情を同時にもつアンビバレンスのなせる技だろう。

後半は、ポチが喧嘩に見事に勝ち、毒入りの餌も効かず、一緒に三鷹に引っ越しできるようで、全てがめでたし、めでたしだった。

課題図書で、前回読んだ『姥捨』では、自分が飼い慣らしたと思い込んでいた共依存関係の妻に裏切られ心中未遂して、俺はこの女を愛しているが別れるなどアンビバレントなモノローグが綴られていた。

飼い主に従い自分の考えを言葉にしない犬は捨てずに可愛いがるが、行動や考えを操作できない他人との関係は築けないのである。

キリストの発言にいっとき救われても、核心のところで希望を失ってしまえば魂は死んで、心中してくれそうな他人を探し続けるだけなのだろうか。

困難無くして権威主義や共依存に足を掬われず他人同士が一緒に生きるのは不可能だが、相手が動物なら、容易いのである。

（おわり）

※無断転載禁止

メルマガ読者　玉井さん

第二回・緊張の緩和ケーススタディ

本書『畜犬談』読後の乃公、愚にもつかぬ雑感以下に編み出したり。

▼あらすじ:
犬嫌いの男がひょんなことから野良犬のポチを飼うことになったがある日ポチが皮膚病を発症して最悪だったけど同タイミングで引越しの話が持ち上がったのでこれ幸いと男はポチを殺そうと毒薬を混ぜた肉を与えたがなぜかポチが死ななかったことをきっかけに男は芸術化としてのあるべき姿を見出してポチを殺すのをやめてみんなで一緒に引越すことになりましたよっていう心温まる Heartwarming Story。

▼緊張の緩和について:
この話を辛辣と捉えるか、あるいは滑稽と捉えるか。私は後者の滑稽談だと思ったので以下に根拠を説明する。
まず、太宰治が多用する笑いの手法があり、その傾向として次の四つの条件を同時に満たすケースが大半である。

①主人公(語り手)は生真面目な性格である。
②主人公のプライドが高い。
③主人公はクソどーでもいいことに悩んでいる。
④筆致に「である調」を用いる。

上記を満たすとなぜ笑いが生じるのかというと「緊張の緩和(※1)」が作用するからである。
※1・・・このメカニズムについては過去に開催された『風と共に去りぬ』読書会における拙感想文参照。

▼本書『畜犬談』における「緊張の緩和」サンプル:
前述の手法が本書のどこに存在するのか、まあそれは全体通してそんな感じなんだけどまずはシンプルなケースを以下に挙げる。

<<私は、まじめに、真剣に、対策を考えた。私はまず犬の心理を研究した。>>

これは前文で「真剣に対策というフリ(=緊張)」を利かせて、次の文で「犬心理研究というオチ(=緩和)」に繋げており非常に平易な例だといえる。その他、何点かピックアップして紹介すると、まず主人公の男は作中冒頭～中盤にかけて犬を嫌う理由を延々と語っており、彼の犬に対する思いは、

<<青い焔(ほのお)が燃え上るほどの、思いつめたる憎悪である。>>
<<日に十里を楽々と走破しうる健脚を有し、獅子をも斃(たお)す白光鋭利の牙を持ちながら、懶惰無頼(らんだぶらい)の腐りはてたいやしい根性>>

と、大そうな四字熟語を用いながら糾弾している、犬を。たかだか犬を。と同時にそんな自分自身を、

<<犬は、私にそのような、外面如菩薩(げめんにょぼさつ)、内心如夜叉(ないしんにょやしゃ)的の奸佞(かんねい)の害心がある ※以下略※>>

とこちらも大げさに心の内を告白しており馬鹿々々しい。そして犬を殺すべきでない理由は、<<芸術家は、もともと弱い者の味方>> だからとの事で、この、アホが 2 秒で考えたかの様な唐突かつピンと来ない理由を恥じることなく妻に説明しており、そして妻は <<浮かぬ顔をしていた>> からの、<<やはり浮かぬ顔をしていた>>。これで一応オチが付いたせいか作者は作品に緞帳(どんちょう)をおろしたものと見える。

といったことを考えながら、ぼんやりしていたところ、「笑いを説明するなんてヤボはアカンぜ……」という桂米團治の声が聞こえてきた。

以上

（おわり）

信州読書会　主宰　宮澤さん

『世間の隘路』

宮崎県の椎葉村で、猟友会が猪を狩っている昔の映像を見た。（昔の NHK 特集の再放送 『椎葉・山物語』）
１０匹ばかりの犬が、谷あいまでオスの若猪を追い詰めたのだが、反撃されて、２匹が瀕死の重傷を負い、何匹かが、怪我をしていた。雑種の駄犬とはいえ、向こう見ずな勇敢さがあるものだと思った。
勇敢な犬たちを見ていて、フォークナーの『熊』という短編小説を思い出した。伝説の大熊を狩に行く話である。猟犬たちは熊と勇敢に戦い、殺されていく。代々、山奥で自立して生きてきた村人たちの強い意志を感じた。

さて、『畜犬談』である。

読了後に、なんとはなしに、『姥捨』を思い出した。『姥捨』は、男が、浮気した妻と水上温泉に心中に行く話だった、

妻との心中を、ペットでも捨てに行くかのように描いていた。よくよく読めば、妻をペット扱いしているような気がして、私には、違和感が残った。

『畜犬談』は、まさに、皮膚病を患ったペットの犬を引っ越しにあたって、殺そうという話である。
その犬は、主人公が、飼いたくて飼った犬ではない。行きずりの腐れ縁でたまたま飼っただけである
それも、主人公の煮え切らない中途半端な優しさからできた腐れ縁である。

想像するに、太宰は寄ってくる女性にも、万事この態度で接したのだろう。
自分の優しさにほだされてずるずる女性と関係を持って、捨てるに捨てられず、心中未遂を繰り返したのだろう。

『畜犬談』の皮膚病を患った犬と、『姥捨』の浮気して薄汚れた妻と、同じではないか。

捨てるに捨てられない、懊悩。

『弱者の友なんだ。芸術家にとって、これが出発で、最高の目的なんだ』

弱者というのは、中途半端に他のものに優しくして、苦労を背負い込む。だけど、救いきれる強さも、決断力も判断力も足りないのである。おのれの手に余れば、逃げてしまう。そして、自分の無力に凹み、傷つく。
だから、世間では生きづらい。
そういう性格の弱い人たちの同伴者であること。
それが「芸術の出発で、目的だ」と太宰が言っている。

そうかも知れん。しかし、そう決めてしまえば、ますます世間の隘路に迷い込むという気がした。
ニーチェならば、芸術は、強者のものだというだろう。それは、世間の隘路を打ち破り、新たな道を切り開くから。
弱者救済のキリスト教が、結局、弱者のルサンチマンだとニーチェが批判するのは、その意味だ。

（おわり）

※無断転載禁止